

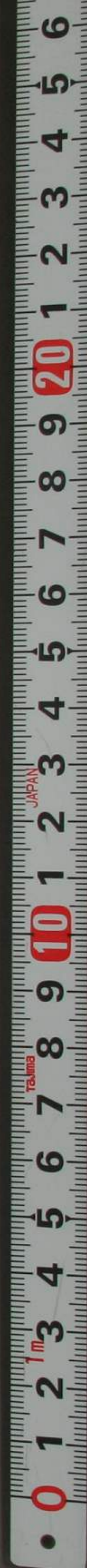


関ヶ原軍記

初編 七七

七八

遠 13
2207
14





遠 13  
 2207  
 卷 14

池清

関ヶ原軍記初編卷之廿七

目録

- 一 細川頼中守の妻女死の事
- 一 并上野野伏足内城は押寄る事
- 一 若狭少将勝俊病の事
- 一 并茶師上林竹庵義常の事

和 漢

貸本所

東京牛込細工町

誠光堂

池田屋清吉

凡士農工商も夫々の職を家業子因て抽用の只物を言ふ  
 今日と信むる世果一般の然るに世写本の巻中柳白家  
 可き種々の書入又ハ秋之賞來りき本偶人賦見書  
 男女の陰持を画き君臣父子の申中々面と赤め合事  
 同多し是第ハ必竟一時の興ノ寧ノての戲遊やんハ係  
 其職分ハ道具ハ疵付ハハ解トナリ著述拙筆者ハ係  
 何をも只言信と云々其遇ちと外免卷中の戲画樂書等ハ後  
 池田屋常は是と歎然然不喜深一因て承代りて諸君子許さるる爾  
 磨石山人識







入まんと侍子の七川細川君  
兵の書室取とまげやう子修  
城刺殺して生害も却く依  
見乃撤一の石田方四万騎を  
りして攻りら子撤代多兵彦左  
弟つえおも  
内府公は御公をまゝびお女中  
かへ城御清衆く頼る是有合せの

武士数千余人必死を極めあり  
義城を骨士乃勇氣感をもてま  
の事之

古終るいよく女り二後の  
まちりり家く阿色バ父母  
ふ志うぐひ嫁してるま下  
よ随ひ老てい子よ随がよ  
是之境あり一生城の内



唯順ただしめて首く其成なり  
何なにせん夫と一ひと之の貞まこと女を支た夫を  
小見こつととて是こゝんのあの  
つつししちちりり凡たゞその多く然ら  
すす斯ごとくく之の雌メ雄オ有り  
て或あるひの借かをを同お穴ちををいい  
くく他たにに交まじりんんやや  
大おほ歸かへりりああやや元もと来きた

傑たけ入いるる名なをを夫と婦を  
とと成なりそのの他たにに交まじりんんやや  
夫と一ひと之の貞まこと女を支た夫を  
成なりるる者ものをを希まれるる凡たゞそ  
女をののこころろととてて教しるる  
ああつつととりり邪よこしまにに見みるる人ひと  
ああけけをを志こころをを夫ととと大おほ切き  
形かたちちち他たにに交まじりんんやや  
在あるる在あるる



の時を有のまゝに兵部見  
放逸して或ひいふ事  
妙法おるまゝに事也  
子のまゝとありて女乃  
恥とまらざるなり誠  
細川敏中や法師の文下の  
こゝろ二心ありて  
と志真ありて日教を

事の中真女とありて  
なり又人質の事いふ  
木曾義仲の嫡子清光の  
冠志をりて頼朝に進  
せらるる事申兵部の例  
ありを上古も是有  
とてども未だ定りあ  
む人質をいざして二人



あつ時々その人どちか  
刑けい罪ざい是是亦或り人の大い  
あつをちちり又何程の  
業さう一もも妻子と教しやう  
てる人の樂しみありあ  
ん南なん時じの江戸表あはてありあ  
日本五中其徳大なる人  
徳ありて邦を治す所

蘭らん園えんゆり思ひての性しやう素  
ぬりかき一これを万代不易  
の要よう害がい也是  
内府公のありき 思ひて  
あるまじくして大園おほえん在世せいせん  
時より徳五世大だい小せう名の業さう  
子もこのくく大坂おほさか平  
於おほく人ひと質しつとする処ところあり



去時どく千一のうび置東江  
下向ありし徳大名の妻の子  
成りしぐく石田治平中補が  
斗らひしそ大坂城内へ入るべ  
まより下知しありしうく  
美田福崎を娘めとして二拾  
三人の法おれ妻ありとありん  
は池田輝政の室なる

内倉公乃の娘表ゆ急伏見よりあり  
志らるよ細川忠真の妻女の明  
智光秀がむまありして容  
顔美麗あり又此のく貞信  
の姓あり先年太閤の侍妹  
人そ嫁し嫡子あり一席出生  
して夫婦のあつは漢く  
忠真も又不便なるの千一也



いんより時子人質を博内は  
のうとまうくをいん松田伴成  
細川平左衛門 小笠原正奇次  
よんで秋身は明智日向守が娘  
あり志うるお父よまま長信長  
公次室一あひて惣兵衛を天下  
年結さんむぎんの免とそげ  
結女次女よび秋身大坂博内

生捕るるバありとも秋身よ  
以てろろのりまうく室東お對  
二んろろバ人よ乃袖辱とろけ  
よぬらんろろい共一郎の明智が  
血縁やどらろろ表裏れ武士  
ありとありまらんろろは惜く  
おれろろありまろろ迎ねん祖父  
幽奇様あろろび子史ト秋身



度より小園東洋御恩<sup>おん</sup>誠<sup>まこと</sup>慕<sup>も</sup>むり  
より依<sup>よ</sup>りて永<sup>なが</sup>所<sup>とこ</sup>今<sup>いま</sup>先<sup>まづ</sup>立<sup>た</sup>る<sup>時</sup>時  
にあつてはとてあつては秋子<sup>あきこ</sup>お一<sup>ひと</sup>席<sup>せき</sup>も  
石田<sup>いしだ</sup>平<sup>ひら</sup>根<sup>ね</sup>み<sup>み</sup>結<sup>むす</sup>りて手<sup>て</sup>づら<sup>り</sup>ま  
合<sup>あ</sup>致<sup>ぢ</sup>も<sup>も</sup>み<sup>み</sup>て<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>これ<sup>これ</sup>金<sup>かね</sup>こ  
又<sup>また</sup>上<sup>かみ</sup>忠<sup>ただ</sup>真<sup>まこと</sup>秋<sup>あき</sup>子<sup>こ</sup>忠<sup>ただ</sup>利<sup>り</sup>し<sup>し</sup>後<sup>ご</sup>骨<sup>ほね</sup>地<sup>ぢ</sup>  
ま<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>む<sup>む</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>た<sup>た</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>  
た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>鼓<sup>つづみ</sup>手<sup>て</sup>火<sup>か</sup>と<sup>と</sup>扱<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>我<sup>われ</sup>ら<sup>ら</sup>生<sup>せい</sup>寔<sup>じつ</sup>

せん<sup>せん</sup>と<sup>と</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>折<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>石<sup>いし</sup>田<sup>だ</sup>が  
役<sup>やく</sup>者<sup>もの</sup>来<sup>き</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>城<sup>しろ</sup>内<sup>うち</sup>の<sup>の</sup>行<sup>ゆ</sup>き<sup>き</sup>と  
堂<sup>どう</sup>立<sup>た</sup>る<sup>時</sup>に<sup>に</sup>衆<sup>しゆ</sup>長<sup>ちやう</sup>の<sup>の</sup>衆<sup>しゆ</sup>と<sup>と</sup>大<sup>だい</sup>  
を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>け<sup>け</sup>又<sup>また</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>た<sup>た</sup>る  
お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>よ<sup>よ</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>て<sup>て</sup>階<sup>かゝ</sup>に<sup>に</sup>殺<sup>ころ</sup>す  
手<sup>て</sup>際<sup>わき</sup>あり<sup>り</sup>忠<sup>ただ</sup>真<sup>まこと</sup>の<sup>の</sup>妻<sup>さい</sup>女<sup>によ</sup>を<sup>を</sup>二<sup>ふた</sup>女<sup>によ</sup>  
れ<sup>れ</sup>子<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>入<sup>い</sup>才<sup>さい</sup>に<sup>に</sup>胃<sup>い</sup>子<sup>し</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>  
さ<sup>さ</sup>し<sup>し</sup>殺<sup>ころ</sup>し<sup>し</sup>咽<sup>のど</sup>を<sup>を</sup>突<sup>つ</sup>き<sup>き</sup>切<sup>き</sup>り<sup>り</sup>火<sup>か</sup>の



中へ飛入り免しつらぬ連をん  
賢女の志しゆり家たお免  
それを見く今いこそまなく之  
とて刺ちぐくまきくしれる  
ふ百余人大中へ入く免し  
ありつらぬつてこのより  
子連又を切へ流をしつらぬ  
この体よつらぬ人の妻子を

城内に入きての都つく大の  
宮よ替るべしこそ人質の妙  
法をおやまけりつらぬ如藤  
清正乃人質の大木古佐 梶川  
七を替るし如及毒明の人質の  
川村権吉清くをひ取り本玉へ  
帰らゆりつらぬ人質の  
城内へ入るごとく替るし



去れば細川忠真の妻女の貞信  
を女子のよき子布ゆりと  
徳人そんを感稱するこの娘と  
すく細川父子を石田増田  
ふ深くうらみとのこして  
手づから死致しむとあり  
初く物玉をいれ徳軍將  
大坂はをせあつかり石田一調

ト合せんとは叔も石田二娘を  
七月十九日佐和山越張して  
八幡山陣とありこのせり  
依見の城を布く敵とあり  
吾身ゆへ人殺するに佐和山  
平のこして只三子余人  
率先陣を渡左近藤生  
後中二陣を舞を屏梶原



彦右衛門のお籠る平——さうなり  
手押——立くく上宗——あり  
手替りひあ——天晴  
送統の大将と見——あり細玉大  
名を何——石田が下知成る  
子のせう三華の八幡陣——  
馬也り斗り——大坂——あり  
徳将と射めん——初巻の由

運も今この時——  
まが伏見の志ろ——攻め  
鳥居と封——軍神と系  
と——と評定——手分と  
定むまづ成美の方——浮田秀  
系二百余人七宮代方——金吾  
秀秋八子余人小乃手——増田長  
豊——去来正系——徳将直成——



余人又知至のを召み人子三  
子余人と授けたり西の首の  
勝津義弘も千余人召合四万  
六子余人南一旨も能く  
對より變長又年八月朔日子  
於之依名城の前後左右とり  
ありけり

若狭少將後能病の  
并桑師ら林井屋義常の  
中

信平伏見城中に  
西に降死しる回三  
ぶんを冥途へ送る  
此人教とお侍  
が素直の人



教配りの沙汰をきつる高尾城  
ちどめをこれく 無双の勇士  
ちんを備へて討死と覚悟し  
て難城しきりて又小島狭少  
將後を若利小澤の城より  
して重吉秀秋の合見あり  
高九万入る石垣腹して大政  
所の一族たり結し子知るん

む所を録城揚りて後河原の  
少將よりこの時伏見三河丸  
難城しきりて又小島狭少  
將の使者をとりてり  
送らおのむさる石田三成軍  
して師合事合事どのの  
南城むりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりり  
内府公と西入魂三府



この城事跡を今見ると  
うらぶらぶと見ると又の金吾  
どのと一手に成り出陣あり  
まや沸心度次身沸返言あり  
登しとあり志あり千手権僧  
細末がいの目お勝多夫大軍あれ  
を不経時おまりとまことおのひ  
返言あり及むる事ありと

このまじり手勢三子余人現  
率一城を崩く上京せむ  
この時ありとまの冥ヶ原へ  
出張しとまの心大籠病千  
くむがし山千軍兵一長備  
とひひりこの人現あり  
宇治の茶屋上林竹庵の  
御念持をうむむこのせり



御公達乃の侍足舞とく  
多り合七在陣佐とり  
とりよ新越きんといわき  
大さき年いりあてきでん  
そであれを侍人うそ  
をゆく城をいである  
後さへ退去せりといふ  
林りりりるいあそん長袖乃

所づんやどととたをの  
あ一日ごう 内府公乃  
御前よりで侍用も  
作舟と色とるお今このせり  
子おあくとをれが一人  
のぐん瑞りおのく討免乃  
後御上流あるとも 御目足  
とぬらまが 我あも子や孫



毛阿り子の時子息元元世心  
子孫乃繁榮永くくべしと  
いふくきる疾が急智の小是是  
成急して終まらちトあせり  
実や孫後と成つて生れて  
病ありに上林が常氣あり  
唯自慈心人の心のお遠あり  
いふく上林と今よおあて

茶師と成く衆の衆たり  
池清

冥々茶師記初篇巻の亦七終  
池清



池清

関ヶ原軍記初篇卷之拾八

目録

一 鍋嶋直茂義之仍て鳥居が頼三と

請合ふ事

并伏見城合戦の事

一 浮田勢敗軍の事

并小西勢各居が為る敗軍の事



池清

園ヶ原軍記初編卷之廿八

鍋橋直茂なべはし ちか茂と依よく鳥居とりいが頼たの

事ことと交まじり合あわす

事こと并なら依より城しろ合あわす戦いくさの事こと

去程きょじやうより七月しちがつ廿九日にじゅうきゅうにち御ご承うけ辨わせ

と申まをすまをすまをと申まをすまをと申まをすまを

と申まをすまをと申まをすまをと申まをすまを



急いそぎのく荒あ怪かいありき君きみとら女に中  
ろんとむるしく成なりありん  
事ことこれち志し傳でんしあん行ぎょう年ねん  
脚あしけをきんと名なひのおり  
鍋なべ湯ゆあらじは徳とくむべとり  
作つくせありの廊ろう松しょう子しと何なにも  
手て鍋なべ湯ゆを今いま幸さいひり先せん陣じん  
とるのくき後ご橋はしはあり

とてを敷し入いくむそらに鍋  
湯ゆのたまりのいひい入いるはいはは  
とるを居いえんありの和わ賀が書しよ度どと  
西せい法ぽう持ぢしりありの鍋  
島しまのいれの何なに用ようとも知しらぬ  
まの對たい面めんはいしらぬを居い  
とも松しょう法ぽうはい産さん右う傳でんのと産さん敷し  
通とりて二に腰こしとも有ありの無む刀たうあり







この情思死しても忘却は  
うらみと涙を流してこのみ  
りねばかたきつて涙を  
けえお  
が忠貞をうらみ感して天啓  
そ度の内心中  
肉府公元  
依見地あづけ部村の秘あり  
今るんその公達と喜し  
膏とせんやおせなりし

今膏の送りおさるべし田道  
此細川吉与方一秋あり  
中へまわり合致の習ひ  
格別ありゆるんは若菜女中  
よばこの女士とて送り  
んと云ふ此志し  
えお大ましく恨んで  
懐中へ取りあはる女中と







軍少して味方の小勢あり  
志うれき勢の多小なるを  
内府公叔歩城  
去人殺と 名に正この城  
のしゝ 意あり後二度近  
實に出能く殺して  
徳川家代武骨と形り討死  
まゝさるりさるる互ひに松

の御まのりくる常しく物各  
くたうひをととげべしと  
いひられおのりあつとも  
と回んして酒汲らるその  
後手分と定りより先布丸  
千の巻を衣衣束の耐え忠次  
上林竹庵雑兵二百八十余人  
二の丸千の内度浮次衣束の三



百八十余人三の丸此物懸掛  
よら松平直度助同く入左馬つ  
依此紀後さおこの惣勢八百余  
人疾の男も松丸の橋此焼落  
一矢余狭間此押寢此籠を立  
銃砲此配りて大軍此押寄す  
を待待よりけり却て寄手此面々  
浮田重むを始りて七月

晦日此早朝手押寄せく四方  
の軍急の聲波の声の百千此  
雷轟き度可居るをさごとく  
あがりてこの大城中此急士等の  
かへる居るをいづく貝籠を  
鳴らし籠の手とさごとくあり  
て周りを急攻合はると等しく  
一時手寄手の急攻と押張て



氏舎破り銃炮を打つて  
福麻布韋にぐるぐるに丸く  
しり城中より脱れ路が尽  
狭路ともいふ所へ銃炮を  
打出しるの霰の走るが如く  
あり終れどもあまの楯竹束  
決りて造らぬく只一時  
不素破も下知しり故

たの死を一途にきりあ矢砲と  
あしやんあいのごとく  
目も胸も大軍あるを死人を  
喜報し押造らぬごとく  
不造らぬくこそ思ふ事なり  
ん

浮田惣次軍の中







所りて翌日の執心しん冥中めいに  
款を招め虎は引入きしり候て  
四角を名あまうにお致し武  
骨と形りてことごとく討死  
すまふに冥途の内衆は遠の  
英信ありて具正直あり法由  
よても善く感心も逆賊の  
法將も周をあげ石田が形勢の

勢せう手つぎさとし生せいどころがごとし  
去書小回く虎を死して  
皮を剥き葉の枯て葉りとは  
ぬり人々死しと名を子  
まとうや部のごうく虎よ  
限くは毛物死して皆卒  
城残すもせし調法さして  
毒をせし生涯より山野より候



とりへて丸くしある時その  
皮をきき人乃めてつるまじ物  
じぬりておろし世に申あ  
調法とぬらひを皮をぬ  
ある毛物も巻へておろしなり  
又草木の喜交花咲実なり  
て秋もぬりての多く枯て其  
葉を拾ひ命と救ふて其  
葉

葉と鞠の況んや人写す  
あるてとや丸くしてつるま  
佛のぬらんとおろしなり  
午のつるまぬらんとおろしなり  
何卒つるまぬらんとおろしなり  
葉とをげや丸くぬらんとおろしなり  
やうにまじりておろしなり  
ぬらんとおろしなり



名を擧ぐる事なく故く  
呼ばるゝ悪名孩童多志うれば  
名を擧ぐりしも二品あり  
苦悶より小穉うらむ名  
お孫の如く今世の人  
苦悶より名を擧ぐる事  
故く用じ乱世ありあつた  
事を知まば唯平一人ん

同じ事あり今世毒の人  
免して以後長人と云ふ  
事あり故く用じ事あり末  
の毒及んで人の心を  
下るゝ如く永悟無難を  
生じ一生大く小く皆凶穢  
一死無援なり即ち彼人  
を命のあつた他人の害



よるるのさざら人ありに  
惜さ人ことさうお  
これ刻ち大醫人あり仍て  
只一人乃喜よるさざら根  
耳こころあけべき之危角  
士農工商ともいえ後の名  
を大ふりありえよるさ  
身の名をいれむといふる

下愚の極ありまよる  
多難をいづるの結  
武士たる者よ於てとや楠  
正成朝臣の石碑ありび  
佐友隆信忠信是事が養れ  
ぬ百年よあふとつた  
今見るとさる名を車取く  
近きい交長又年八月日



山城の圍伏見乃城に於て  
戦免成

徳川家乃師家長居元忠  
松平家忠 内及家長松平  
近正おこの河乃忠免の古

今一帯とすは短あり  
斯多大阪乃軍將徳田秀家  
之進子 攝子乃小物り長中の

子乃磯津義弘 錫崎直茂等  
也查の丸れ子乃金吾秀秋おとし  
却合其勢五男勝人老造て徳兵  
急子攻をる城名松平直麿之物  
吉惣門大手と堅ありより結  
壯年此嘗おして士卒と下知  
る鉄砲を打出しとて人々  
大軍捕殺せしめて竹素とつけ



一時千壹破れと搦まらるる此節  
主殿命よりより為長元忠内度  
衆長松平近正より中送り  
りらこのちうろえ階ぐ時を惣  
搦りの破きやきあり急ぎ打て  
出く一處も追拂ゆるをよあり  
といふつて二回ありといふ同  
く城内の軍乞支旨一ありく

突おより主殿之初を南年四十五  
女とびくの軍功に武常の  
名高く百人千秀で一ツ  
うめて突初を極ありから出物見  
せんといふ系織一はらあひひく  
今乃緒形おしる境をといふ  
是のよりお系采配ありつて  
志先くをみ追手れつを押



家ありて家出たりおきくが  
家人より平田内記 酒井助左衛門  
精度藤三郎 横河徳兵衛 松平  
九郎同く利勝 大平九郎  
二衛本生邦彦 鹿角の武士八拾  
入騎雑乞二百余人相續ひて  
内及孫次右衛門の家長家本内  
千銀のとりをいのりぶとて

宋配<sup>すいはい</sup> 腰<sup>こし</sup> 白柄<sup>しろがら</sup>の薙刀<sup>かみばな</sup>と  
了<sup>り</sup> 此<sup>こゝ</sup> 年<sup>とし</sup> 折<sup>をり</sup> 搦<sup>な</sup> 二<sup>に</sup> 目<sup>め</sup> と 以<sup>も</sup> て  
押<sup>おし</sup> 出<sup>し</sup> せし 者<sup>もの</sup> 随<sup>ま</sup> ぐ 家<sup>いへ</sup> 人<sup>ひと</sup> 千<sup>せん</sup> 石<sup>いし</sup>  
源<sup>げん</sup> 吉<sup>きち</sup> 丈<sup>ぢょう</sup> 修<sup>しゆ</sup> 木<sup>き</sup> 三<sup>さん</sup> 所<sup>しよ</sup> 吉<sup>きち</sup> 丈<sup>ぢょう</sup> 梶<sup>かぢ</sup> 木<sup>き</sup>  
源<sup>げん</sup> 治<sup>ぢ</sup> 小<sup>せう</sup> 川<sup>かわ</sup> 本<sup>ほん</sup> 彼<sup>か</sup> 乞<sup>ぎ</sup> 四<sup>し</sup> 十<sup>じゆ</sup> 余<sup>よ</sup> 騎<sup>き</sup> 雑<sup>ざつ</sup> 乞<sup>ぎ</sup>  
二<sup>に</sup> 百<sup>ひやく</sup> 余<sup>よ</sup> 人<sup>にん</sup> あり 千<sup>せん</sup> 石<sup>いし</sup> の 女<sup>め</sup> 心<sup>こゝろ</sup>  
只<sup>ただ</sup> 一<sup>ひと</sup> 時<sup>とき</sup> 折<sup>をり</sup> て 出<sup>し</sup> たり 後<sup>のち</sup> 小<sup>せう</sup> 源<sup>げん</sup> 田<sup>でん</sup>  
中<sup>ちゆう</sup> 綱<sup>かう</sup> 乞<sup>ぎ</sup> 秀<sup>しゆ</sup> 家<sup>け</sup> 乞<sup>ぎ</sup> 軍<sup>ぐん</sup> 乞<sup>ぎ</sup> 平<sup>へい</sup> 乞<sup>ぎ</sup> 二<sup>に</sup> 万<sup>まん</sup> 余<sup>よ</sup> 人<sup>にん</sup>



有と云及戸川 飛唐木乃西の  
此郡浪人して後々士大夫將を  
く色あき立く鹿口と逢ふ人  
まの時直度之柳下知して敵の目  
み余の大軍あり只一慮に密令  
首をば交して免べりしは打捨  
せりしつるやどお二遠支州の  
烈の御衆はつるを考るべし人

の嫌ひ好くおとるに内度強次  
右来つ嘉長二陣と持く退きて  
ふち浮田勢の足る者お人あぶ  
まことつるく引退さく直度之  
浮城右来つ馬と寄せく兵敵を  
ば退んが為あらせえ来敵を糧勢  
あり浮入しては免さるまごと  
軍をときりくつらつり



大手此の千入くガト時付体息  
又吾ヤ獲ホるマと死シりて待マけケり  
流マ名カ多ク 東恩マ乃ノ四シ目メ利リ  
よそ御ミ 命ノれルらるル毒ドク手テ此コ大オ將  
官クニ車クルマ乃ノ武ブ常ジョウのノ形カタと形カタりレるル  
又マ搦ニ手テより押オシ出デしテるル為タ居ル  
彦ヒコ志シ事コトのノ名ナをヲ南ミナミ年トシ六ム十ジウ二ニ女メ  
よして武ブ常ジョウ此コ古コ名ナあり先マ年トシ

味方ヶ系ケ之シ合カ戦セ乃ノ時トキ武ブ田デンの大オ  
敵テキと戦セらレるル軍イクサ功コトと形カタりレし  
其ソノ時トキたリ此コ是コト武ブ常ジョウ接ケツ色シキりレるル  
家イヘ川カハ不フ自ジ由ユちカらんル武ブ馬バ上ノ乃ノ遠トウ  
者ヤぬル復マをヲ獲ホらレるル者モノをヲ得エるルべシ外ナシ  
のノ在ア威イ 此コ美ミよシ返マりシるル  
鏡カガミひヨ相ア禁カ子コ赤アカのノ鳥トリ帽カブト子コ形カタ乃ノ  
うウがガとト志シしテ合カ乃ノ二ニ相ア鳥トリ帽カブト



の前建物月毛此約く折ま  
けり志さ記千季却して小物  
橋津ちが軍名極駕く此  
とらととらへると季入とて南  
城本丸の大將 徳川家純  
長尾重者長尾景虎の尉元忠也  
いづもや小物船解の徳との遠  
れ登りし二刻者の論先見よ

とて突入しりお随がよ士千の  
松平又左衛門忠忠 山林竹屋本  
手勢彼乞又百余騎籠城の声  
城揚く同く徳を入るしり  
後了小物が軍名長尾景虎合せく  
討んとしりらに音長え忠者  
三天又すれち力と留へるしり  
折振く士年と前後くして



下知<sup>し</sup>込<sup>こ</sup>傳<sup>つ</sup>へく<sup>く</sup>款<sup>く</sup>る<sup>る</sup>只<sup>し</sup>一<sup>い</sup>錢<sup>せん</sup>の<sup>の</sup>下<sup>もと</sup>  
年<sup>ねん</sup>あり<sup>て</sup>小<sup>こ</sup>西<sup>せい</sup>が<sup>が</sup>名<sup>な</sup>と<sup>と</sup>追<sup>お</sup>拂<sup>ひ</sup>へ<sup>へ</sup>と  
下<sup>した</sup>知<sup>ち</sup>し<sup>し</sup>南<sup>なん</sup>博<sup>はく</sup>政<sup>せい</sup>只<sup>し</sup>一<sup>い</sup>日<sup>じつ</sup>の<sup>の</sup>攻<sup>こう</sup>成<sup>じやう</sup>あり<sup>り</sup>と<sup>と</sup>色<sup>しき</sup>  
ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>只<sup>し</sup>森<sup>もり</sup>ま<sup>ま</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>袖<sup>そで</sup>あり<sup>り</sup>と<sup>と</sup>露<sup>ろ</sup>  
習<sup>しゆ</sup>多<sup>た</sup>辨<sup>べん</sup>り<sup>り</sup>同<sup>どう</sup>く<sup>く</sup>堅<sup>けん</sup>横<sup>ごう</sup>より<sup>より</sup>け  
ま<sup>ま</sup>より<sup>より</sup>世<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>名<sup>な</sup>を<sup>を</sup>長<sup>なが</sup>が<sup>が</sup>古<sup>こ</sup>刀<sup>かたな</sup>先<sup>まへ</sup>く  
武者<sup>むしゃ</sup>六<sup>むつ</sup>騎<sup>き</sup>を<sup>を</sup>する<sup>る</sup>より<sup>より</sup>下<sup>した</sup>千<sup>せん</sup>切<sup>きり</sup>て  
筋<sup>すぢ</sup>も<sup>も</sup>小<sup>こ</sup>糸<sup>いと</sup>が<sup>が</sup>穿<sup>く</sup>る<sup>る</sup>糸<sup>いと</sup>の<sup>の</sup>部<sup>ぶ</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>ち

く<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>小<sup>こ</sup>上<sup>じやう</sup>林<sup>りん</sup>井<sup>い</sup>屋<sup>や</sup>の<sup>の</sup>法<sup>ほふ</sup>師<sup>し</sup>武<sup>ぶ</sup>者<sup>しや</sup>を  
同<sup>どう</sup>く<sup>く</sup>備<sup>び</sup>け<sup>け</sup>た<sup>た</sup>小<sup>こ</sup>糸<sup>いと</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>る<sup>る</sup>法<sup>ほふ</sup>  
師<sup>し</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>下<sup>した</sup>千<sup>せん</sup>あり<sup>り</sup>と<sup>と</sup>糸<sup>いと</sup>の<sup>の</sup>物<sup>もの</sup>  
西<sup>せい</sup>倒<sup>たう</sup>之<sup>の</sup>長<sup>なが</sup>刀<sup>かたな</sup>と<sup>と</sup>糸<sup>いと</sup>車<sup>ぐるま</sup>なり<sup>り</sup>也<sup>なり</sup>  
して<sup>して</sup>糸<sup>いと</sup>を<sup>を</sup>長<sup>なが</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>款<sup>く</sup>或<sup>ある</sup>騎<sup>き</sup>を<sup>を</sup>  
切<sup>きり</sup>る<sup>る</sup>糸<sup>いと</sup>一<sup>い</sup>つ<sup>いつ</sup>糸<sup>いと</sup>く<sup>く</sup>糸<sup>いと</sup>名<sup>な</sup>  
は<sup>は</sup>糸<sup>いと</sup>の<sup>の</sup>糸<sup>いと</sup>なり<sup>り</sup> 内<sup>うち</sup>府<sup>ふ</sup>公<sup>こう</sup>代<sup>だい</sup>



上覧申入きうたりのありき  
多る長子足するえ忠こころ  
竹庵此手がけしも岡平五乃首  
恬や身ん今のちや款をば  
追拂ひしりこのふき忠一日之  
とも城を堅固くちりて討死  
す人さるあり志をくく門とる  
今しとてこれく城内年

入る木戸と下り  
たり  
油漬

関ヶ原軍記初編巻の廿八終  
油漬



